

英国における「政策のための科学」に
関する取組の一考察
– CAPE (Capabilities in Academic
Policy Engagement) を中心に –

政策研究大学院大学 (GRIPS)

SciREXセンター 准教授

野呂 高樹

t-noro@grips.ac.jp

発表概要

1. CAPEの概要
2. CAPEの主な取組
3. CAPEの注目すべき最近の成果物
4. 日本への含意

参考情報

参考文献・ウェブサイト

1. CAPEの概要

- ▶ CAPEは、UCLとケンブリッジ、マンチェスター、ノーサンブリア、ノッティンガムの各大学のパートナーシップで、政府科学局、議会科学技術局、Nesta、Transforming Evidence Hubと共同で実施されており、**Research Englandの資金援助を受けている。**
- ▶ CAPEは、**イングランド全土の様々な地理的・政策的背景における学術と政策の関わりをよりよく理解し、強化することを目的**としており、公共政策への学術的なインプットの質と敏捷性を向上させるための介入策を設計、テスト、評価する。また、参加者の多様性を向上させることにも重点を置いている。
- ▶ Research England からの 390万ポンド（約6.7億円）の資金に加えて、パートナー機関もさらなるリソースを提供し、**プロジェクトの総額は 1,000万ポンド（約17.2億円）近い。**
- ▶ 2020～2024年のプロジェクトでは、学術と政策の関わりを支援するためのエビデンスに基づく様々なツールやリソースを開発し、ネットワークと知識の共有のための共同プラットフォームを提供する「**大学と公共政策のためのバーチャルセンター（virtual Centre for Universities and Public Policy）**」を設立する予定。

1. CAPEの概要

<プロジェクトの目的>

- ▶ **研修プログラムおよびスキル開発**を通じて、大学内および政策専門家のキャパシティとケイパビリティを構築する。
- ▶ 政府の様々なレベルや地理的な状況において、**関与や知識交換を促進するための活動やメカニズムを開発**する。
- ▶ 大学や政策関係者が利用できるよう、継続的な評価やエビデンスに基づく**フレームワークやツールキットの提供**を通じて、エビデンスや知識ベースを構築する。
- ▶ 大学・公共政策センター（Centre for Universities and Public Policy）を設立し、ネットワーク構築とプロジェクトリソースの共有のための**オンラインプラットフォームを提供**し、広く利用できるようにする。

(出典) CAPE - What we do : <https://capestag.wpengine.com/what-we-do/>

CAPEのウェブページ : <https://www.cape.ac.uk/>

1. CAPEの概要

<成果 (Outcomes) >

- ▶ CAPEは約4年間で、**公共政策の策定に情報を提供し、エビデンスに基づいたベストプラクティスを提供することに大きく貢献すること**を目標としている。
- ▶ CAPEは、パートナー機関の**学術・政策連携活動の実施を通じて、学術・政策連携のルート**を強化し、**大学部門や異なる公共政策領域における学術・政策連携の発展を支援**する。

<プロジェクトの内容>

- ▶ **知識交換と学術・政策参画活動を実施**し、話題の分野での継続的な政策立案に情報を提供する。
- ▶ **プロジェクトの学習と評価を継続的に広く発信**し、大学部門全体および政策専門家と共有する学習を支援する。
- ▶ ガイダンス、評価とインパクトのフレームワーク、エビデンス活用に関する学習ツールキット、ケーススタディなど、**学術と政策の関わりを支援するためのリソースを開発**する。

2. CAPEの主な取組

主な取組としては、

- ▶ **CAPE Policy Fellowships (CAPE政策フェローシップ)**
- ▶ **Seed funding (シードファイディング)**
- ▶ **Training (トレーニング)**
- ▶ **Knowledge exchange events (知識交換イベント)**
- ▶ **Evaluation (評価)**
- ▶ **ネットワーク**

が挙げられる。

(出典) CAPEのウェブページ : <https://www.cape.ac.uk/>

2. CAPEの主な取組

<CAPE政策フェローシップ>

- ▶ **研究者と政策専門家のパートナーシップを構築・強化**するためのもので、研究者が政策組織で仕事をする場合と、政策専門家が大学で過ごす場合の両方に利用できる。
- ▶ CAPEの優先テーマは、**地域（および地方）政府のレベル**において、学術と政策の関わりを深めること。
- ▶ 多くの地域当局やパートナーとともに、**地域の知識の仲介や科学・研究のアドバイザー能力を高めるための様々な選択肢を模索するための作業プログラムを開発**している。
- ▶ その目的は、地域政策の優先課題に取り組み、地域政策の専門家に価値を提供するために、**大学から政策コミュニティへの独立した学術的専門知識とエビデンスの流れを増加させる**ことである。
- ▶ このプログラムでは、知識ネットワークを構築し、大学、地域当局、その他の政策関係者間の効果的かつ迅速な関与を動員し、**政策立案と実施におけるエビデンスと学術的専門知識の活用を支援**する。

2. CAPEの主な取組

政策プロフェッショナルのためのフェローシップ

- ▶ CAPEパートナー大学の**様々な分野の一流研究者にアクセスできる柔軟な専門家育成プログラム**で、エビデンスに基づいた政策の開発を支援し、革新的なキャリア開発パスを提供し、学者と政策専門家のコラボレーションを促進
- ▶ 実績としては2021～2022年に17名、2022～2023年に22名

研究者、学者、プロフェッショナル・サービス・スタッフのためのフェローシップ

- ▶ CAPEの大学に在籍する研究者、学者、専門サービススタッフで、地方、地域、政府、その他の政策組織で**3ヶ月から1年間**の政策フェローシップを行う。
- ▶ すべてのCAPEフェローシップが政策経験を必要とするわけではなく、**学術的な政策活動への参加が初めての方からの応募も積極的に受け入れている**
- ▶ CAPEは、フェローシップ期間中、チーム内に専任の担当者を配置し、必要に応じて政策トレーニングの受講も可能。既存のフェローは15名。

2. CAPEの主な取組

<Seed funding : CAPE Collaboration Fund>

- ▶ 当ファンドは特定の政策ニーズに対応するために、研究者が少なくとも1人の政策パートナーと共同開発したプロジェクトを支援するもので、**1件あたり最大25,000ポンド（約4,775,000円）まで利用可能**
- ▶ 2020年から2024年にかけて、**40万ポンドを超える20件のプロジェクトを支援**。採択テーマとしては「学術的専門知識を求める政策立案者の質問を構造化するツール」「サステナビリティ政策におけるシステム思考の共創」など

～資金提供される可能性のある主な活動～

- 学術と政策のコラボレーションを新たに、あるいはより深くするための呼び水とする
- 政策ニーズや公共政策課題に関連する研究活動や知識交換活動の共同開発
- 政策ニーズに関連するトピックについて、外部のステークホルダーと会議やワークショップを共同開催する
- 新たな政策課題に関する共同開発のブリーフィングを速やかに作成する
- 継続的な政策立案に役立つ分析、リサーチ、ブリーフィングを共同制作する
- 政策の専門家と関わる機会が限られており、政策の窓口を逃してしまう場合の政策の専門家への関与の機会
- 政策パートナーから委託され、共同生産的な方法で行われる研究

2. CAPEの主な取組



政策立案者の学術的専門知識を求める質問を構造化するツール

政府科学庁（GO-Science）のマグダ・オスマン氏

プロジェクト名：学術的専門知識を求める政策立案者の質問を構造化するツール

プロジェクト日程：2022年1月～2023年3月

CAPE大学パートナー：ケンブリッジ大学

政策パートナー：政府科学局（GO-Science）

概要

このプロジェクトでは、CSaPの政策フェローシップ・プログラムからの3000の質問の政策フェローからのデータ・セットを調査し、政策問題を構造化して学術的専門知識を最大限に活用するための研究と知識交換を実施します。

この研究は、政策フェローからの意見を参考に共同で設計されており、分類システム（政策質問の分類法）の開発を目指します。これは、政策質問をさまざまなカテゴリーに分類するために使用されます。たとえば、指導的/手続き的調査のカテゴリー（「特定の政策結果を達成する方法」）に該当する質問はいくつあるか、予測カテゴリー（例：10年後の政策xの姿を推定する）に該当する質問はいくつあるかなどです。

この研究では、さまざまな対象者（政策フェロー、学術専門家など）が、良い質問とは何かをどのように判断するかについても検討します。これは、グラフィカルツールを調べる実験作業に役立てられます。グラフィカルな表現（因果マップなど）は、複雑なアイデアを伝える簡単で効果的な方法です。したがって、このプロジェクトの2番目の要素は、政策フェローが知識交換プロセスで学術専門家にニーズを伝えやすくするために、質問を表現するのに最適なツールの種類を調べることです。

2. CAPEの主な取組



持続可能性に関する政策におけるシステム思考の共創 (COSTIPOS)
政府科学局 (GO-Science) の Nici Zimmerman

プロジェクト名：持続可能性に関する政策におけるシステム思考の共創 (CoSTiPoS)

プロジェクト日程：2022年6月～12月

CAPE大学パートナー：ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン

政策パートナー：政府科学局 (GO-Science)、王立工学アカデミー

概要

ネットゼロ、英国グリーン・ニューディール、そしてより一般的には持続可能性の課題に対応して、英国はシステム思考に向かう傾向を経験しています。最新の標準/戦略は、より総合的な意思決定方法を実装するという政府部門の野心を示していますが、各部門は意思決定にシステム思考をどのように実装し始めるかについて大きな知識のギャップを経験しています。CoSTiPoS

プロジェクトは、政府科学局 (GO-Science) との緊密な協力を通じて、現在GO-Scienceが開発中の公務員向けシステムツールキットのさらなる開発と早期実装を通じて、政策立案者が意思決定にシステム思考をどのように実装できるかについて新たな洞察を生み出します。私たちはシステム思考フレームワークを共創し、システムツールキットとの早期の関わりを検討して、意思決定者とともにシステム手法、ガイドライン、ツールをさらに適応させます。CoSTiPoS は、専門的な方法に焦点を当てるのではなく、これまでシステム思考にほとんど触れたことがなく、厳しい期限と高いプレッシャーの中で取り組んでいる政策立案者にとって、システム思考をさらに受け入れやすいものにする方法に焦点を当てます。CoSTiPoS

は、英国王立工学アカデミー (アカデミー)、GO-Science、UCL の優れたネットワークを活用します。また、システム思考プラットフォーム助成金、CUSSH、HINIS、CAMELLIA プロジェクト、2つのインパクト加速助成金、および BEIS との以前のコラボレーションで開発されたシステム思考の研究と方法論も活用します。たとえば、BEIS と共同で開発およびテストされた方法論とツールをさらに開発して、参加していない利害関係者の声を部屋に持ち込み、ツールを使用して複雑なシステムに対するさまざまな利害関係者グループの優先事項と視点を視覚化します。

2. CAPEの主な取組

<トレーニング>

- ▶ 2つのトレーニングワークショップを通じて、大学の研究者やナレッジブローカーの政策関与能力の向上と、意思決定者のエビデンス利用と学術関与能力の向上に焦点を当て、**意思決定における研究の質、アクセス性、敏捷性を向上**させることを目的としている。
- ▶ トレーニングワークストリームは、プロジェクトパートナーのNestaによって運営。

<知識交換イベント>

- ▶ 特定のトピックに関する学術と政策のネットワークを構築し、エビデンスニーズに対応する最善の方法を理解するために、**様々な共同制作の知識交換とエンゲージメントイベントを実施**している。

<評価>

- ▶ CAPEでは、プロセスを繰り返し開発するための内部モニタリングから、パートナーである**Transforming Evidence社を通じたプログラムの国内評価**まで、あらゆる場面で評価を取り入れている。

<評価における調査内容>

- 政策関係者や政策へのインパクト
- 学術関係者や研究者へのインパクト
- エンゲージメントが最もよく達成されるメカニズム
- 幅広く多様なエンゲージメントがどの程度可能になるか
- 持続可能性と適応性
- 介入の再現性と拡張性

2. CAPEの主な取組



Contents

5	What is this toolkit for?	15	Module 1: Introduction to evidence use and expert engagement	221	Annexes
	Who is this toolkit for?			237	References
6	What capabilities does the toolkit support?	59	Module 2: Rationale and objectives		
8	How the toolkit has been structured	106	Module 3: Appraisal		
9	How to use this toolkit	132	Module 4: Monitoring		
10	How to support complex learning pathways	153	Module 5: Evaluation		
11	I want to...	188	Module 6: Feedback		
14	Hack this toolkit	213	Module 7: Embedding and sustaining		

2. CAPEの主な取組

<ネットワーク>

- ▶ **LRAAA (Local and Regional Authority Academic Advisors) ネットワーク**は、CAPE政策フェローを含む、地方や地域の文脈におけるアドバイザリーの役割の継続的な発展・進化の一環として、サイロ化した慣習を減らすという熱意とともに創設。
- ▶ このネットワークはCAPEによって招集され、レベルアップ・住宅・コミュニティ省のチーフ・サイエンティフィック・アドバイザーが議長を務めた。
- ▶ **イングランド全土のアカデミック・アドバイザーとその政策ホストで構成され、CAPEから資金援助を受けている者と、より広範なネットワークが、学術的な政策関与を進めるといふ共通の目的を持って集まった。**
- ▶ LRAAAネットワークの設立には、4つの主要な目的があった。
 - 異なる役割やコンテキストにおける経験や学びを共有すること
 - 地方政府が学術的なエビデンスや専門知識にアクセスする際に直面しうる持続的な課題を探ること
 - 学術アドバイザーの役割が公共政策や政府のエコシステム全体の中でどのように位置づけられるかを理解し、そのような役割に対する理解を深めること
 - 地方政府・地域政府にとってそのような役割がもたらすメリットを理解すること

2. CAPEの主な取組

<ネットワーク>

- ▶ **Policy Knowledge Brokers Forum(PKBF)**は、CAPEが軽いタッチで招集した、政策組織で政策ブローカー的役割に携わる人々のためのネットワーク。

PKBFの目的は以下の通り：

- ▶ 政策実務家が学術コミュニティとの関わりから生じる洞察、教訓、ベストプラクティス、課題を共有するための「安全な場」を提供する。
- ▶ 共通の関心事項を探り、学術コミュニティとの関わりを進めるための知識やアイデアの交換を支援する。
- ▶ 議論から得られた共有の学びや洞察を把握する。
- ▶ フォーラムの議論で明らかになった課題に取り組むために、CAPE、UPEN、その他の外部ステークホルダーと協力する余地がありそうな場所を特定する。

3. CAPEの注目すべき最近の成果物

(1) 政策フェローシップ成功のための6つの柱

- ▶ 政策フェローシップは、研究者と公共政策機関との間の流動性と知識交換を支援する仕組みとして、**ますます認知**されてきている。
- ▶ フェローシップは、研究者が政策機関に派遣されるだけでなく、政策専門家がアカデミアに派遣されることもある。
- ▶ フェローシップは、大学、資金提供者、政策機関にとって多大な投資であり、**時間と労力を必要とする**。
- ▶ より広範な学術的・政策的関与の努力の一環として、政策機関に入る研究者のために、成功する政策フェローシップを開発・提供する方法についての理解を深めることを目的としてツールキットが提供されており、**フェローシップ成功への6つの指導原則や柱「準備」「埋め込み」「実験」「柔軟性」「相互理解」「統合」**を特定している。

(出典) CAPE: Research to Policy Fellowships: Six Pillars for Optimising Success, 2024

3. CAPEの注目すべき最近の成果物

(1) 政策フェローシップ成功のための6つの柱

「準備」

- ▶ 出向契約の管理など**事務的な準備**や、必要なトレーニングやサポートを提供する**知識ベースの準備**、異なるチームや文化的環境を理解し効果的に働くための**文化的準備**、利用可能な補足資金や成果物を提供するための資源に関する明確な指示など、**プロジェクトの準備**が挙げられる。

「埋め込み」

- ▶ フェローが組織の背景や業務の進め方を十分に理解することは、双方に利益をもたらす。フェローをホスト組織に組み込むことで、フェローシップの成果が政策システムに組み込まれ、**政策チームはフェローシップ期間終了後もフェローのアイデアや成果を活用し続けることができる。**

「実験」

- ▶ CAPEフェローは、実験が中心的な要素となっているフェローシップの機会に惹かれることが多かった。**フェローシップでは、より多くの質問を投げかけ、それをパートナーとともに試すことで、エビデンスを理解するためのより総合的で探究的なアプローチを促進する。**

3. CAPEの注目すべき最近の成果物

(1) 政策フェローシップ成功のための6つの柱

「柔軟性」

- ▶ 綿密な計画や戦略を立てても、予期せぬ課題や機会が頻繁に現れる。そのため、**フェローシップではあらゆる段階で柔軟なアプローチが求められる**。CAPEでは、フェローが閑散期や異動時に別のプロジェクトを担当できる柔軟性を高く評価していることがわかった。

「相互理解」

- ▶ 政策アクターと研究者は、独自の規範、価値観、仕事の進め方、言語を持つ、異なるコミュニティに属しているため、フェローシップは、すべての関係者が**互いの仕事のやり方を受け入れているときに、知識の共有を最も助長**する。

「統合」

- ▶ **知識の交換メカニズムとしてのフェローシップの成功は、成果や学習が学术界や政策コミュニティにどの程度効果的に統合されたかという点に密接に関連している**。ホスト機関とフェローが、政策提言や知識の交換の実践を広めるために、既存および新規のパートナーと積極的に関与した場合には、フェローは、自らのプロジェクトを単独の取組としてではなく、大学、地域、関連政策分野への貴重な貢献として捉えることができる。

3. CAPEの注目すべき最近の成果物

(2) 大学の政策関与機能を成長させるモデルや方法、成功の尺度

- ▶ 大学における政策関与の現状と最近の効果的な実践を明らかにした報告書「**Growing a university policy engagement function: Towards better models, methods, and measures of success**」が2024年に公表
- ▶ 本報告書では、**大学政策参画機能 (university policy engagement function) の拡大を目指す大学が考慮すべき点を概説**している。検討すべき事項は**17項目**ある

1) どのような構造、リーダーシップ、資金調達のモデルがあるのか？

- 現実的なケースだけでなく、原則的なケースを作る
- 政策機能の4つのタイプについて考えてみる：政策インパクト支援室、知識仲介者、政策エビデンス生産者、需要主導型関係構築者
- 政策と学術の「第3の空間」で能力を発揮できるスタッフを採用し、育成する
- 上級経営陣内に支援者がいる。経営陣の支持と副学長や上級経営陣との緊密な関係は、成功の重要な要素である
- 多様な資金による「混合経済 (mixed economy)」を成長させる。多様な資金源を検討する
- 連合 (coalitions) やコンソーシアムに参加する

3. CAPEの注目すべき最近の成果物

(2) 大学の政策関与機能を成長させるモデルや方法、成功の尺度

2) どのような方法で政策に関与するのか？

- 政策テーマの優先順位付けの弊害に注意する。優先分野の選定はあくまでも出発点であるべきで、目まぐるしく変化する予測不可能な政策ウインドウの中でインパクトを与える機会を得るためには、ある程度の余裕を持たせる必要がある。
- **地理的な焦点を絞る**。政策に関与する一部の機関は、地方レベルに焦点を絞ることで恩恵を受けている。
- 対象者を定義し、分類する。政策テーマの選択には困難が伴うが、それでもなお、対象者をある程度絞り込み、あまり広範に広げ過ぎないようにする必要がある。
- 政策に影響を与えるために、普及方法だけに頼ってはならない。政策ブリーフィングやその他の普及方法を単独で実施しても、現実の政策立案環境におけるエビデンスの利用を改善するには不十分である可能性が高い。
- **能力を育成し、関係政策への関与を支援する。学術的なスキル開発、研修、出向、ネットワーキングを検討**する。
- より広範な研究政策システムを認識し、対応する。**大学の政策部門は、より広範な支援環境や文化、および研究関心領域(Areas of Research Interest)のようなシステムレベルのアプローチを含むより広範な研究政策エコシステムを考慮すべきである。**

3. CAPEの注目すべき最近の成果物

(2) 大学の政策関与機能を成長させるモデルや方法、成功の尺度

3) エンゲージメントを測定する方法は？

- 政策関与における「厳格さ (rigour)」を監視し、計画する。2029年には、研究評価活動において、政策関与における「厳格さ」を示すことが、「範囲」や「重要性」と並んでより重視されるようになる。
- 政策関与のプロセスについて、より多くの学習と共有を行う。知識を共有するために、ピアツーピア・ネットワーク、メンター、組み込まれたアクションラーニング、全学的な実践コミュニティなど、公式の学習構造を構築することを検討する。
- **フレームワークや変化の理論を活用する。エンゲージメントとインパクトについて考えるための正式な構造を構築することを検討**する。
- **より革新的でユーザーフレンドリーなツールを見つける**。計測の管理負担を軽減するために、OvertonやResearchfishのようなインパクトを把握するための様々なプラットフォームの利用を検討する。
- 他から学ぶ。効果的なエンゲージメント戦略を計画するために、他分野や他国を含め、他者から学べる既存の教訓や戦略があるかもしれない。

4. 日本への含意

- ▶ 我が国では、科学技術イノベーション（STI）政策における「政策のための科学」推進事業（SciREX事業）において、2024年9月14日に、事業を実施している各拠点の教職員などを招聘して、第7期科学技術イノベーション基本計画に関する議論（ワークショップなど）を行った。
- ▶ 以下は一部ではあるが、その主な議論の結果である。
 - SciREXの**コミュニティ**は、大学の中だけでとどまってしまっている部分があるのではないか？事業としていったん区切りが付くというタイミングで、もう少し**拡大**をしていけたらいいのではないか？
 - SciREXの**目指す理念、目指すところ**がどういうものなのかをはっきりさせて、それに共感する人たちが集うようなコミュニティに**ブラッシュアップ**できたらいいのではないか？
 - **政策リエゾン機能をもう少し強化**をして、いろんな大学のいろんな人、あるいはいろんな行政官をつなぐみたいなことができるといいのではないか？
 - コミュニティにいる人がどんな知見や関心を持っている、どんな人がどこにいるのかというのが把握可能な、**マップ**みたいなものがあって、タグ付けとかされていて、外の世界の人と話すことに対してオープンの意思表示をした人だけ、その中に入っていて、その人たちは、基本的には話し掛けるのも話し掛けられるのも歓迎だし、その人たちで集まるような機会もあるみたいな形にできるといいのではないか？

4. 日本への含意

▶ 主な議論の結果（つづき）

- ▶ EBPMが少しずつ市民権を得て、だんだんと行政の中でエビデンス化を欲しいというときに、どの大学やどの教員がその辺りのデータを持っているだろうというような**データベース**があれば、非常にたやすく行政のほうから連絡を取り、それで、常にその専門としている人たちが喜んでデータを提供できるというような、Win-winのところがあればいい。
- ▶ 大学に対する評価の在り方等について、エビデンスがあまり十分に蓄積されていない弱い領域に対して、（EBPMの強調は）政策立案をむしろ阻害する可能性があることを踏まえて、むしろ**エビデンスが弱い領域というものを改善していく、その問題を解除していくということが重要**ではないだろうか？
- ▶ 20年後の理想的社会の姿を基本の設計図として、**いろいろな部局、いろいろなイノベーション政策の間関係を見直して、それをつなぎ直して、システムチックに配置する**という、こういう質問と答えの過程が7期の基本計画に入る必要があるのではないか？
- ▶ 個別・分断ではなく、全体の科学技術イノベーションという「全体感」を持つようなグループコミュニティーになっていくべきではないか？**少し長期的に研究投資のポートフォリオを考えるべき**ではないか？（過度なコンプラや、非常に細かいKPIからの脱却も含む）

4. 日本への含意

▶ 主な議論の結果（つづき）

- ▶ 研究力の強化の根幹にあるのは**人材**であるということで、人材育成、博士人材、小学生からのSTEM教育、研究人材のインバウンド化を進めるべきではないか？そのための**国としてのブランドデザイン**も必要である。ジオポリティックスの問題に絡めて、ルール形成や標準化、オープンサイエンスへの対応も重要である。
- ▶ その他、基礎研究を含めた優先順位付けとエビデンスを政策の中に活かしていくこと、そのための**行政官のエビデンスリテラシーの涵養**、EBPMに関する調査（EBPMが本当にどういう効果を出しているか？）を進めること、エビデンスのための人材以上**につなぐための人材という人材の層をもっと足すべき**こと、**政策科学・政策研究コミュニティと政策立案者のコミュニケーションを強化すべき**（フラットに議論すること、評価指標に関して**多様な側面を考慮に入れた評価指標を作成**していくこと等も挙げられた。
- ▶ これらの議論の内容は、上記の**英国のCAPEプロジェクトにおける主要な取りまとめ（成果物）で提言されていることと多く重なる**。CAPEは公共政策を対象としており、STI政策を主な対象としている我が国のSciREX事業よりも範囲が広い。CAPEの取組や成果から学べる事項は大変多く、今後公開される報告書なども注意深く見ていく必要があるだろう。

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

- ▶ 政治や政策の変化に伴い、大学、研究助成機関、政府による活動と投資が増加し、学術界と政策界の関わり方の変遷が継続的に進んできた。
- ▶ これにより、**2020年初頭の状況よりもはるかに豊かなエコシステムが形成**されている。この4年間で、**CAPEが重要な貢献をしたと思われる4つの重要な進展**があった。

1. **学術と政策の連携の「正当性 ('legitimacy) 」の向上**
2. **学術と政策の連携活動の促進**
3. **持続可能な構造の開発 (Developing sustainable structures)**
4. **中間支援組織と実践を通じた学習の価値の重視**

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>



Sarah Chaytor

Co-Investigator, Capabilities in Academic-Policy Engagement, Director of Strategy and Policy,
University College London

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

1. 学術と政策の連携の「正当性 ('legitimacy) 」の向上

- ▶ CAPEを設立するにあたり、「学術と政策の連携」という用語を、学術研究者と公共政策コミュニティ間の相互作用を意味するものとして使用した。これには、資金提供者、協力者、その他の関係者とのさまざまな対話が含まれ、学術と政策の連携が何を意味し、なぜ重要であると考えたのかを説明した。
- ▶ 2024年には、もはやこのような対話はいらない。**この4年間で、学術-政策連携が「正当な」アジェンダ、すなわち真剣な検討を要し、資金提供者の投資に値するアジェンダであるという認識が高まってきた。**
- ▶ この背景には、Research EnglandがCAPEへの資金提供を決定したことがある。**CAPEは、イングランド全域のさまざまな政策レベルにおける学術-政策連携の能力と構造を構築し、Research Englandをはじめ、より幅広い層にこの取組への注目を集めることを目的とした、機関レベルで資金提供された初のプロジェクト**であった。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

1. 学術と政策の連携の「正当性 ('legitimacy) 」の向上

- ▶ この正当化の動きは、学術界、研究資金、公共政策の分野でその後の証拠が見られる。**大学を拠点とする政策関与ユニットの数は増加**しており、大学と公共政策の関わりを円滑化するインターフェースを提供する**Universities Policy Engagement Network (大学政策関与ネットワーク)**は、5年以内に100以上のメンバーに拡大。
- ▶ **UKRI**は、Research EnglandによるPolicy Support Fund (政策支援基金) の導入と並行して、**Policy Fellowships (政策フェローシップ)**と**Local Policy Innovation Partnerships (地域政策イノベーションパートナーシップ)**を設立。
- ▶ 政府および議会内でも、**政府の研究関心領域 (研究ニーズの声明) の開発やテーマ別研究リーダーの任命など、重要なイニシアティブが実施**されてきた。

(出典) Sarah Chaytor: "There is nothing permanent except change": CAPE's contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

1. 学術と政策の連携の「正当性 ('legitimacy) 」の向上

- ▶ CAPEを通じて、学術界と政策界の連携を強化し、主要な課題に対する認識を高める方法について、**円卓会議、ワークショップ、公開イベント**などを通じて、セクター全体および資金提供者や政策立案者との議論の場を設ける機会を得た。
- ▶ これと並行して、**報告書やツールキットからブログやケーススタディに至るまで、さまざまな成果物を発表**し、共通の課題を浮き彫りにし、学習を共有する手助けをしてきた。
- ▶ これらすべては、学術研究と公共政策の連携に投資する必要性に対する認識が高まり、効果的な連携を確実にするための新たな戦略が開発されるなど、**より成熟した学術-政策連携**の状況を示している。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

2. 学術-政策連携活動の促進

- ▶ CAPEの目標は、さまざまなメカニズムを試すことで、学術-政策連携の規模と多様性を拡大する「**触媒**」効果をもたらすことであった。
- ▶ 実際には、すでに確立されたプログラムを基盤とした活動の開発と、新たなプロジェクトを通じて取り組むべきギャップの特定の両方を意味した。
- ▶ 例えば、**科学技術庁とのCAPE政策フェローシップでは、政府全体における人材流動化の機会を模索する既存の取組を加速させ、さらに定着させることができた**。また、政府における「システム思考」についても同様。
- ▶ 一方、食糧・環境・農村地域省とのCAPEの「ポップアップ」専門知識ネットワークは、短期の政策エビデンスのニーズに応えるために学術的専門知識を活用する実験的なアプローチであった。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

2. 学術-政策連携活動の促進

- ▶ プロジェクトの触媒効果は、常に一筋縄ではいかなかった。生じたインパクトの一部は広範囲にわたるものであった。
- ▶ 個々の成果や影響というよりも、**むしろ知識や関係性の向上に貢献する累積的なものであったかもしれない**。例えば、地方自治体および地域当局学術顧問ネットワークなど。
- ▶ いくつかの活動は、徐々に勢いづき、波及効果を生み出した。例えば、ノッティンガムで地域社会のデジタルスキル向上を目的とした政策フェローシップは、**多様な利害関係者ネットワークを構築すると同時に、より幅広いコミュニティの参加を可能にした**。
- ▶ また、イスリントン・カウンシルとの「グッドワーク」アジェンダ開発におけるパートナーシップは、コミュニティ・ユニバーサリズムや職場における弊害の調査をめぐり、シェフィールドのパートナーとのより広範な協力関係につながった。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

2. 学術-政策連携活動の促進

- ▶ 活動を展開するにつれ、**プロジェクト全体に「雪だるま式」の効果が現れた。** CAPEの最初の6か月間、あるいは12か月間は、パートナーシップの認知度を高め、政策立案者との対話を開始して潜在的なニーズや機会を把握し、具体的な政策対応プロジェクトを開発することに重点が置かれていた。
- ▶ 進展するにつれ、CAPEに接触し**口コミで推薦されたり、さらには「飛び込み営業」的なアプローチを受けるようになった**た人々から繰り返しリクエストを受けたり、。
- ▶ CAPEは次第に、政策立案者が活用できるリソースであると感じられるようになった。
- ▶ 例えば、それまで一緒に仕事をしたことのない当時の「平準化・住宅・地域社会省」のチームから、英国全土の地域データの互換性に関するプロジェクトを共同開発したいとの打診を受けた。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学术界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

2. 学術-政策連携活動の促進

- ▶ 触媒としての役割を果たすことで、学術と政策の連携の可能性やそのメリットを示すことができた。
- ▶ また、**地域社会との連携強化や地域における学術・政策インフラの検討など、より幅広い課題にも貢献**することができた。
- ▶ CAPEは長年にわたって安定したリソースを提供してきたため、地方自治体、地域、国政の幅広い政策立案者からの需要と関与を促進する触媒としても役立った。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

3. 持続可能な構造の開発

- ▶ 上述の触媒効果は強力だったが、触媒活動だけでは必ずしも十分ではないことが分かった。組織やシステム内で関与を維持し、活動を定着させ、進歩を築くための**持続可能な構造を確立することが極めて重要**。
- ▶ CAPEの「**研究関心領域 (Areas of Research Interest)**」の実践拡大に向けた取組は、このことを示している。私たちは英国議会で2つのフェローシップを支援し、議会内の審査ユニットおよび科学技術に関する議会事務局と緊密に連携しながら、**合同特別委員会の勧告を実行に移した**。
- ▶ この勧告では、特別委員会が研究関心領域を確立すべきであると提言していた。フェローシップの期間中、8つの議会特別委員会の研究関心領域が策定・発表され、議会とこれまで関わったことのない学者たちの関与が大幅に増加した。その後、CAPEフェローの拡張と「移行」により、セネッド議会との間でさらに7つの研究関心分野が開発されることになった。研究関心分野を確立し、証拠のニーズを伝える仕組みを構築したことで、両立法府の学者と政策立案者との継続的な関わりを広範に刺激する強力な手段が提供され、学術研究者の恒久的な入口が提供された。

(出典) Sarah Chaytor: "There is nothing permanent except change": CAPE's contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

3. 持続可能な構造の開発

- ▶ 地域政策の立案においても構造的な介入が行われた。ウェスト・ヨークシャーのCAPE政策フェローシップは、ヨークシャーの大学およびウェスト・ヨークシャー合同当局と協力し、地域イノベーションから女性や少女に対する暴力に至るまで、さまざまな問題に対処する共同活動と成果を数多く生み出した。
- ▶ このフェローシップは、ヨークシャー政策関与・研究ネットワーク（ヨークシャーおよびハンバー地域全体の大学、地方議会、合同当局を結びつけ、地域に根ざした政策立案を強化する）のビジネスケース構築にも貢献した。
- ▶ また、**CAPEの政策フェローシップは、ロンドン全域の研究者と政策立案者を結集するロンドン政策・研究パートナーシップの設立を支援**した。
- ▶ 一方、ノーサンブリア大学が主導するCAPEの活動は、インサイト・ノースイースト（同地域の大学、ニューカッスル市議会、ノースイースト合同当局、NHSのパートナーシップ）の発展に貢献し、**旧ノース・タイン合同当局との初の地域研究関心領域の設立を支援**した。これらの組織は、地域の政策のあり方を変えるのに役立っており、研究の専門知識と政策立案者をつなぐ重要な仲介的役割を果たしている。

(出典) Sarah Chaytor: "There is nothing permanent except change": CAPE's contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

4. 中間支援組織の価値と実践による学習を重視する

- ▶ CAPE以前は、大学や資金提供者において、学術研究と公共政策の橋渡しをする中間支援組織や知識移転の役割に焦点が当てられることはほとんどなかった。
- ▶ 私たちが学んだ重要な教訓のひとつは、**中間支援組織は不可欠なインフラを提供しているものの、その存在はあまり目立たないことが多い**ということである。
- ▶ **中間支援組織は、学術界と公共政策コミュニティをつなぐ結合組織として機能し、関係や活動を維持するための接着剤の役割を果たす。**
- ▶ **中間支援組織は、組織レベルで効果的かつ持続可能な学術-政策連携を構築するために不可欠。**これは、最近の地域インフラへの資金提供者の投資で認識されている通りである。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

4. 中間支援組織の価値と実践による学習を重視する

- ▶ **仲介者の役割は、能力 (capacity) の提供においても重要**。学術-政策連携の多くは、プロセスが十分に開発されておらず、複雑で相互依存的な経路を持つため、運用面で集中的な取組が必要となる。
- ▶ 仲介者は、スムーズなプログラムの実施と効果的な連携を支援するために、必要とされる能力を提供する。
- ▶ また、私たちの**反省的実践 (reflexive practice) の定着と「実践による学習」の共有への取組は、効果的な知識活用の実践に関する幅広い議論を活発化**させることにも役立っている。
- ▶ 特に、CAPEは、本質的に複雑で厄介なこの業務の運営上の複雑性を明らかにするのに役立っていると考える。
- ▶ CAPEのツールキットの多くは、他の仲介者とともに効果的な実践を構築し、議論するために、実際的で現実的な課題に取り組むことを目指している。

(出典) Sarah Chaytor: "There is nothing permanent except change": CAPE's contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

未来を見据えて

- ▶ 学術-政策エコシステムの今後の進化に目を向けると、私たちの実践と影響力を前進させるために**注目すべき6つの分野**が浮かび上がる。
- ▶ これらは、個々の専門スタッフや研究者、大学のリーダー、研究資金提供者、政策立案者など、それぞれが担う役割を持つ人々にとって重要な意味を持つ。

1. 「知識交換」と「関与」の分野を統合する

- ▶ 大学は、他のセクター（ビジネス、一般市民、政策、医療、地域社会など）との研究活動への関与を、依然として個別の事業として捉える傾向がある。しかし、**より統合的なアプローチから得るものは多く、異なる専門分野におけるさまざまな方法論や実践から学ぶことができる**。そのためには、大学と資金提供者は、知識交換について、セクターごとの縦割りではなく、セクター間の関与を支援し、その機会を最大限に活用するという観点から考える必要がある。

(出典) Sarah Chaytor: "There is nothing permanent except change": CAPE's contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

未来を見据えて

2. 英国における公共政策への関与についての考え方を広げる

- ▶ 大学では、公共政策への関与とはウェストミンスターやホワイトホールとの関与を意味するという考え方が一般的。
- ▶ しかし、英国は国や地域ごとに複雑で多層的な政府システムから成り立っており、**特に地方レベルにおける学術的な証拠や専門知識の吸収能力を強化し、政策立案における不均衡の是正を支援する必要がある。**
- ▶ 地方議会や合同当局との学術政策の関わりは、中央政府との関わりと同様に重要。また、政策担当者や政治家だけでなく、学術的な証拠や専門知識を活用できる幅広い中間組織や市民組織をよりよく認識する必要もある。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

未来を見据えて

3. 公共政策への「インパクト」という単純な考え方を乗り越える

- ▶ 学術研究と公共政策立案の間の複雑な相互作用を、より明確に説明する必要がある。**研究の影響力が政策変更に等しいという単純な考え方ではなく**、学術的専門知識が貢献できる関与ルートや政策機能の全範囲を評価すべき。
- ▶ これには、**初期段階での思考や対話の形成から、問題の明確化、政策の精査や評価、詳細な政策設計など、さまざまなものが含まれる。**
- ▶ この複雑性と微妙なニュアンスを、政策への「成功した」研究の影響を反映する評価枠組みの中で、より明確に表現する必要がある。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

未来を見据えて

4. 長期的な視点を持つ

- ▶ 学術界と政策界の交流の多くは、単発または期間限定の活動に焦点を当てた取引的な形態にとどまっている（多くの場合、資金面の制約が原因）。
- ▶ これは、有意義な長期的な協力や持続可能な継続的な関係の発展を妨げるものである。
- ▶ また、**個々の失敗要因に左右されやすい関係性を作り出す**。個々のプロジェクトの成功に焦点を当てるのではなく、**長期的で多角的な関係を支援することに焦点を当てるべき**。
- ▶ そうすることで、特定の交流や活動を支えることができる。これにより、学術的な貢献が最適なタイミングで、真に需要主導で行われることがより確実になる。

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

未来を見据えて

5. 研究と政策を結びつける専門家の役割を評価する

- ▶ 大学や政府、その他の政策関連組織において、**「仲介者」や「知識の活用者」としての役割を担う人材**が増加していることは、学術と政策の連携のエコシステムにとって極めて重要な貢献である。
- ▶ 私たちは、彼らのスキル、特性、能力をより深く理解する必要がある。そのためには、知識の活用に含まれるものを明確にするための共通言語が必要である。
- ▶ また、**知識の活用に対するより深い認識、キャリアパスの強化、そして知識の活用と学術と政策の連携を研究活動に統合する必要がある。**

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

(参考) CAPEは学術界と政策界の関わり方の変遷にどのような重要な貢献をしたか？

未来を見据えて

6. 組織基盤の構築

- ▶ 個人や個々のプロジェクトへの投資だけでは十分ではない。
- ▶ 学術機関と政策立案機関の両方における**組織能力 (Institutional capacity)** は、学術と政策の連携を推進する上で極めて重要。
- ▶ 組織能力は個々の活動を支え、政策ニーズや新たな機会に対応するための機敏性を確保し、長期的な関係を維持する。
- ▶ 個々の組織内およびより大きな連携を支援するための**組織基盤の強化は、学術と政策の連携の将来の健全性を確保するために不可欠。**

(出典) Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>

今後の報告予定テーマ

- ▶ EUにおける評価の取組（Horizon 2020事後評価、Horizon Europe中間評価）
- ▶ AIと行政（米国、英国、EU）
- ▶ EUにおける次期フレームワークプログラム（FP10）の議論動向
- ▶ EU（主にJRC）における「政策のための科学」の取組動向

5. 参考文献・ウェブサイト

- ▶ CAPEのウェブページ : <https://www.cape.ac.uk/>
- ▶ 野呂高樹 : 欧州連合 (EU) における「政策のための科学」に関する取組動向からの学び、季刊 評価クォーターリー (一般財団法人行政管理研究センター) 第70号、令和6年7月
- ▶ CAPE: Research to Policy Fellowships: Six Pillars for Optimising Success, 2024
- ▶ CAPE: Growing a university policy engagement function: Towards better models, methods, and measures of success, 2024
- ▶ Sarah Chaytor: “There is nothing permanent except change”: CAPE’s contribution to the evolving academic-policy engagement landscape, 17th October 2024

<https://www.cape.ac.uk/2024/10/17/capes-contribution-to-the-evolving-academic-policy-engagement-landscape/>